

2015年10月4日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書 10章 38～42節

説教 「必要なことはただ一つ」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

エルサレムへと旅をする主イエス一行を、マルタとマリアの姉妹が自分の家にお迎えした時の一コマです。もてなしに忙しく動き回る姉のマルタと、いつしか主の足元で話に聞き入る妹のマリア、やがて姉は、自分だけにもてなしをさせている妹の姿に苛立ち、何と主イエスに不満をぶちまけます。その情景が目には浮かぶようによく分かる話です。しかし、主イエスがそんなマルタに語りかけられた言葉の問いかける課題はとても大きいものがあります。

「一行が歩いて行くうち」とありますが、当時の旅行はとてもたいへんなものでした。王や貴族の旅行ならいざ知らず、主イエス一行の旅には何の保証もなく、行く先々では好意ある人々のもてなしに頼るほかないのです。この姉妹はそんな主イエス一行を迎え入れてもてなし、自分たちの家をいわば福音宣教の拠点として捧げようとしたのです。マルタは一家の責任をもつ女主人です。旅に疲れた主イエスを迎え入れたのはマルタでした。マルタのこうした信仰の決断があって、マリアも導かれて、今主イエスの話を聞いているのです。

ところが、主イエスを喜んでお迎えし、一生懸命仕えようとした姉妹の間に違いが生じてきました。マリアがいつしか主イエスの足元に座り込んでその話に聞き入っていたのに対して、マルタはせわしく立ち働いていたのです。その振る舞いに見られる対照的な姿は、家族や職場や教会で私たちが一緒に働くときにも起こってきそうな違いです。ただそれだけに、私たちはそれを自分たちの体験とか感覚に引き寄せ、姉妹の性格の違いとして批評するのではなく、主イエスがここで言おうとしておられることを聴き取っていくことが大切です。

マリアがしようとしていた「もてなし」とは、ギリシア語の原文ではディアコニアという言葉です。キリストの愛の業にならう奉仕の業であり、教会に託された大切な務めです。マルタとマリアは、主イエスが好きだったからというのではなく、一行の福音宣教に仕え、その歩みを支えるために献身的に奉仕しようとしているのです。だから、マルタとマリアの姿は、タイプの違いだとか、自分はどっちに似ているなどということではなく、どちらも主イエスに従う私たちが大切にすべきあり方なのです。

マルタも信仰と愛をもって主イエスの伝道に仕えているのです。けれども問題は、その愛と奉仕が不満といら立ちに変わっているということです。一生懸命気配りをし、立ち働いている自分が正当に評価されていない、自分だけが損な役回りをしている、そんな思いが込み上げて来て、彼女は不満を主イエス相手にぶちまけてしまうのです。

一生懸命仕えようとしている愛の業が苛立ちに変わるということ、こうしたことは私たちも思い当ることではないでしょうか。正しいことをしている、それだけに、それが思う

ように進まないことや認められないことに我慢ができないのです。使徒パウロは、「愛は忍耐強い、愛は情け深い、ねたまない、愛は自慢せず、高ぶらない・・・」（コリント一 13：4）と書きましたが、愛がすぐに憤りに裏返ってしまうところに私たちの愛の貧しさがあります。

思いがけず感情をあらわにしてしまったマルタに、主イエスは「マルタ、マルタ」と、やさしさと思いやりをもって語りかけられました。主イエスは彼女を決して冷たくあしらっておられるのではありません。「あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している」と言われます。愛と奉仕の業の中で、マルタの心はすっかり乱れてしまい、喜びもなくなっていたのです。そのことを見抜かれた主イエスは言われます。「しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」。

主イエスはマルタのしていることは意味がないなどと言っておられるのではありません。ただ、マルタがその大切な奉仕を、心乱れ、喜びを失い、人を裁くような思いを抱きながらするのではなく、本当に喜んで続けてほしいと望んでおられるのです。そして、そのために必要なことを教えてくださっているのです。それが、マリアのように、主イエスの足もとに座って、その御言葉に聞き入ることなのです。

主イエスは今、神の国の到来を告げ知らせておられます。この神の支配の実現のために、そこに私たちを招くために、主イエスは十字架に向かって歩いておられます。苦難と死と復活をとおして、私たちを罪と死の支配から解放し、神との平和のうちに歩むことができるようにしてください。主イエスによって、神の愛のご支配は実現するのです。

主イエスを信じ、主イエスに従っていくとは、この主イエスのもとに集い、主イエスの語られる福音の御言葉に身を浸すように聞き入ることです。そして、その御言葉を本当に聞くときに、私たちは自分の知恵と力に思い上がることから解放され、自分と他者を比較して、いらだつ思いからも解放されていきます。主の愛の励ましの中でこそ、私たちは自分らしく、主の愛の業に倣う奉仕に生きることができるのです。あのサマリア人のたとえの最後にあったように、「行って、あなたも同じようにしなさい」との勧めと励ましに生きることができるのです。

み言葉に聞き入ることが失われると、私たちの奉仕はすぐに自己実現や自己主張の業に変質していきます。人の目を気にし、評価や見返りを求める思いが生まれます。不満と苛立ちに取りつかれてしまいます。立ち戻るべきところは、主イエスの足もとに座って、その恵みの御言葉に聞き入ることです。「マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」とは、何も一方的にマリアに味方し、マリアをほめあげる言葉ではなく、マルタが喜んで奉仕に生きるために本当に必要なことを教えようとしておられる言葉なのです。

教会とは共に主イエスの足もとに座る集まりです。ここに私たちの力と愛と喜びの源があります。ここから、私たちの主イエスに従う愛と奉仕の業が始まるのです。